

ノートルダム清心中学校

入試科目	算数①	算数②	国語	理科	社会	総合	
試験時間	15分	35分	50分	40分	40分	—	
配点(予想)	*40点	*60点	100点	80点	80点	360点	
受験者平均点	49.8点		50.4点	43.3点	47.7点	191.2点	
合格の目安	得点	32点	18点	51点	44点	48点	193点
	(%)	80.0%	30.0%	51.0%	55.0%	60.0%	53.6%
昨年度との比較	横ばい	難化	難化	横ばい	やや難化	難化	

※算数その①と算数その②の配分は、鯉城学院の予想です。

算 数

【算数その①】

- 1 (1)小数の計算 (2)小数・分数の計算
 2 速さ
 3 つるかめ算
 4 速さと比
 5 数の性質(最大公約数)
 6 分数
 7 規則性
 8 円柱の体積
 9 平面図形(角度と合同)

【算数その②】

- 1 割合・比 小問数：2
 2 容器と水量 小問数：4
 3 整数に関する問題 小問数：3

今年の入試問題の難易度は、その①が例年通りで、その②が難しくなった分、受験者平均点が下がったと考えるべきでしょう。構成は、計算と一行問題の【算数その①】(試験時間15分)と、大問形式の【算数その②】(試験時間35分)の2本立てとなっており、【算数その①】は例年通り10問、【算数その②】は大問3題・小問9問でした。過去問や鯉城学

院の対策模試で練習を積んでいた受験生は安心して取り組めたと思います。

【算数その①】

1は小数の計算と、小数を分数に直す計算の2題です。去年よりもシンプルな数字での出題となっているので、より取り組みやすい印象です。

②は速さの基本問題です。③は典型的なつるかめ算です。④は比を用いて解く速さの問題です。受験生なら何度となく取り組んだ問題だと思います。⑤は最大公約数からタイルの大きさを求めた上で、枚数を求めます。これも典型問題です。⑥ではそれぞれの計算を進めて、大小の見当をつけて比較するのがいいでしょう。⑦は規則性の問題です。最初の輪を26mm、次の輪から18mmで考えるやり方でもいいですし、12個のくさを並べて、重なるところを取り除くのもいいでしょう。⑧は円柱の体積の問題です。体積比を使って計算できれば、時間の節約にもなるし、計算ミスも防げたでしょう。⑨は角度の問題ですが、合同を用いなければならぬという点で難しい問題です。最後の問題なので、時間的にも厳しかったかもしれません。

見慣れた一行問題がバランスよく出題されています。時間配分に注意して、典型問題をすばやく正確に解くことが、合否の分かれ目になります。

【算数その②】

大問1は割合・比の問題です。様々なアプローチの仕方があります。同じような問題の経験値がものをいうでしょう。具体的には、比を実際の数として扱えるようになっていくかが問われています。(1)は割合を比に変換して、えんぴつを2本もらった生徒と1本もらった生徒を5:6とすれば、糸口が見えてきます。5年生があげたえんぴつの本数の合計を比で表現すると、5年生の人数の比がわかります。(2)は6年生が配ったブックカバー全体の枚数を22とおいてつるかめ算で解く問題です。つるかめ算だと見抜けるかどうかを含めて、難度の高い問題です。

大問2は容器と水量に関する問題です。今年度の算数その②では、一番与し易い大問です。受験者平均点から考えると、この大問をしっかり得点できるかどうか、合否に直結するでしょう。(1)は基本的なグラ

フの読み取りです。(2)が解けるかどうかが大問2の分水嶺です。グラフの途中(5分~13分)から見るができるかどうかポイントです。どうしても受験生は、グラフを最初から見ようとする傾向があります。難易度の低い問題はそれでも十分正答できますが、ノートルダム清心中合格を視野に入れると、このタイプの問題も練習しておく必要があります。(3)は(2)ができていない受験生は余裕をもって正答できる問題です。(4)はこの種類の問題ではよく出題される問題です。満水の水量を求めて、おもりがなかった場合の水槽の容積と比較することで、おもりの体積がわかります。後は直方体が2つ重なった体積の問題です。

大問3は与えられたルールに従って整数を並べる問題です。「1か3を含んでいないといけませんが、1と3だけでできた数字は取り除く」という厄介なルールです。かなり注意しないとミスが生じる問題です。(1)は書き出してみてもいいですが、表を用いるともれなく不要な数字を削除できると思います。(2)はかなり注意が必要です。100代の数は概ね条件を満たすが、111、113、131、133を取り除かなければなりません。また200代では(1)では数えなかった201、203を加えることが必要です。100代では取り除いた11、13、31、33が、条件を満たすことになるので加える必要があります。このあたりまで検討してきて、だんだんルールに入り込めるのではないのでしょうか。(3)は(2)を使いながら数える問題です。(2)ができていないと、正答は難しいので、正答率は極端に低くなったでしょう。

典型問題も出題する一方、しっかり考えさせる問題も出題するというノートルダム清心中学校らしい問題構成でした。今年で言えば、典型問題である算数その②の大問2を早く正確に解けたかどうか、そしてその後の問題に注力するかで得点が大きく開いたのではないのでしょうか。過去問でも同じようにしっかり考えさせる問題が出ているので、じっくり取り組んでおけば、本番でも十分に力が発揮できるでしょう。

国語

一 渡邊十糸子『今を生きるための現代詩』	(説明文 約2700字)	小問数11問	うち記述2問
二 西加奈子「孫娘」『おまじない』	(物語文 約4200字)	小問数13問	うち記述2問
三 漢字の書き取り	(10問)		

ND清心中の国語は、2014年から説明文と物語文の大問2題構成が続いていましたが、昨年を引き続き、今年も漢字の書き取りが独立した大問3題構成となりました。受験者平均点は昨年の61.8点に対して、今年は50.4点。マイナス10点以上の大幅な難化です。説明文では文章自体の難易度が上がったことに加え、手強い設問がいくつか出されていることが要因としてあげられるでしょう。また、物語文の文章自体は一見読みやすそうに感じますが、優等生の孫と真面目な祖父が悪態をつくことで心を通わせていくという設定が、小学6年生の力では読みにくかったのかもしれない。そもそも「悪態をつく」という言葉が少しハードルが高く、判然としないまま読み進めてしまった受験生も少なくなかったでしょう。そして、漢字の書き取りでも難しい出題がありました。全体を通して見れば、平均点がマイナス10点もうなずける内容です。

大問一の説明文は「詩」とは何かについての論考でした。詩とは、人間が与えた意味をはなれたところにあり、人間のコントロールからこぼれおちた「世界の手ざわり」のひとつで……といった内容から文章は始まりますが、そもそも「『詩とはこれだ』とひとことで言うことは難しい」と筆者自身も書けるように、本文で述べられている内容が小学生にとって理解が難しいのも当然でしょう。難しいところはある程度割り切りながら、詩を通して新しい世界の見方を知ることができるという前半の要点と、詩を書くようになって詩を通して新しい自分を知ることができるという後半の要点が取れば文章理解としては十分でしょう。問一から問三までは適語補充が続きますが、さほど難易度は高くありません。問四は一文を本文中に戻す適当な箇所を見つける問題で、脱文中の

「背景」が着目すべき手がかりですが、「空」や「雲」だけに注目すると間違えてしまう、やや難しめの問題です。問五は清心ではお決まりの言葉の意味を答えさせる問題。問六は内容理解に関する記号選択で、指示語が指す具体例の共通点の説明は傍線部から離れるうえに、選択肢も難しいため、容易に解答はできません。この辺りから難しい問題の連続になります。問七は傍線部と対象的な内容の一文を答えさせる問題。まず傍線部の内容自体を理解するのが難しいうえに、解答の箇所はずいぶん後のほうです。問八は比喩の内容理解に関する記号選択で、対比の関係になっている次の段落を手がかりにすればいいのですが、やはり簡単ではありません。問九は傍線部の理由に関する記号選択ですが、本文中で明確に理由を述べているわけではなく、根拠を明確にしにくい問題でした。ただし、誤った選択肢が比較的わかりやすく消去法的に探しやすかったのかもしれない。問十は「ちっぽけ」という表現にこめられた意味についての記号選択で、傍線部直後の内容と選択肢をきちんと照らし合わせることができれば正解できます。問十一は「詩の役割」について書かせる90字の記述問題。本文全体を踏まえた要旨をまとめることが求められていますが、空欄にせずに、傍線部直前の内容を書いているだけでもそれなりの点数がとれる解答が書けたのではないかと思われます。この文章の難易度で、要旨をまとめるのは容易ではありません。

大問二は物語文の出題です。お利口さんでいることに少し疲れた小学生の「すみれ」と、娘(主人公のお母さん)の愛情にちょっと疲れた「おじいちゃん」が、おばあちゃんの思い出話をきっかけに二人がいるときには悪態を付き合うことでお互いに心を通わせていくという物語です。

「悪態」という言葉が受験生にとっては少しやっかいだったかもしれません。この言葉がわからないとこの文章をきちんと理解するのは少し難しくなります。問一は漢字の書き取りで標準的なものばかりです。問二は慣用句を解答させる問題で、これも標準的です。問三、問四、問五、問七と、清心らしい長めの選択肢の問題が続きます。本文が読めていれば決して難易度は高くないが、本文とていねいに照らし合わせ、選択肢を細かく読まないといけません。問六と問八の2は80字と60字の記述問題で、ハードルの高い問題でした。大きな解答の方向性を見定めて、それに必要な内容を粘り強く付け加えていくという姿勢が必要でしょう。問八は対話形式の出題で、正しい発言を選択させる問題は標準的なレベルであったと言えるでしょう。

大問三は漢字の書き取り問題です。小学生にはあまりなじみのない言葉が出題されており、漢字の難易度としては高いものでした。「礼節」「固辞」「看過」あたりの正答率はずいぶん低かったのではないかと思います。「銭湯」もひょっとすると今の子どもたちにはほとんどなじみがないでしょうから難しかったかもしれません。

しっかりした読解力、粘り強く解答をまとめる記述力、細かな表現も見落とさず本文と選択肢を照らし合せられるていねいさ、そして「大人の言葉」に慣れ親しんでいるかどうか、これらを高いレベルで求める清心の国語は例年通りですが、今年は難易度のレベルが一段あがったのは間違いありません。はたして来年はどうなるのでしょうか。

理科

- 1 生物分野から、Ⅰ. こん虫 Ⅱ. カメムシの行動 に関する問題 (小問10)
- 2 化学分野から、Ⅰ. 水の状態変化 Ⅱ. 発電 Ⅲ. 水素と酸素の反応 に関する問題 (小問10)
- 3 地学分野から、Ⅰ. 月の満ちかけ Ⅱ. 地球の公転と月の見え方 Ⅲ. ガリレオ衛星 に関する問題 (小問12)
- 4 物理解分野から、 てこと浮力 に関する問題 (小問11)

清心の入試問題は毎年、物理・化学・生物・地学の4分野からの大問4題の構成です。近年は、とうてい時間内には解ききれないような難問や小学生の発想では及ばないような奇問の類は影を潜め、受験の定番といえる知識問題も少なからず大問の中に含みながら、受験生の単元学習の成果を正しく判断できる問題に変わってきたといえます。ただ、県内最難関の女子校なので決して易しくなったわけではなく、近年の受験者平均点をみても、H29年の50.4点(80点満点)を除けば、ほぼ40点くらいになっています。今年も同程度のレベルと考えられます。

1 こん虫という生物分野では頻出の内容で、ⅠとⅡに分かれています。Ⅰは、何度も演習してきた問題が並び、自信をもって取り組めたと思

ますし、ここで失点してはいけません。しかし、Ⅱでは、その印象が一変します。カメムシ(いやな臭いを出すという知識くらいしかなく、入試ではほとんど出題されません。)の行動を実験とその結果からその場で考えていく問題で、まさに清心の入試らしい内容です。ただ、近年の同校の特徴といえる解答するための誘導を虫食いの説明文にそって考えていけば、解答までの手掛かりや糸口は、つかめたと思います。とはいえ、確信をもって解答した受験生は少なかったでしょう。

2 エネルギーについて、Ⅰ～Ⅲの3つのテーマで出題されています。Ⅰ. ガスバーナーの使い方、水の量と沸点についての知識問題、水の状態変化と身の回りの現象とを対応させる問題。ここはしっかり得点した

いところ です。

Ⅱ. 発電についての間違ってはいけない常識的な基本知識です。

Ⅲ. 水素と酸素が体積比 2 : 1 で反応 (燃えて) して水ができるという高校入試では定番の問題です。もちろん、ここではその知識で解くのではなく、実験とその結果を通して決まりを考えていく内容になります。最近、模試などにも少なからず出題されているので、戸惑いはなかったと思います。

③ 天体を 3 つのテーマに分けて出題しています。

Ⅰ. 月の満ち欠けの基本問題で間違えたくないレベルです。

Ⅱ. 地球の自転、公転と月の公転をもとに考える総合的問題で、苦手に行っている受験生は手こずったはずです。

Ⅲ. 木星の 4 つの衛星 (ガリレオ衛星) の公転について、これは、その場の情報から解いていくというまったく予備知識のない問題です。時間をかけたけど出来なかったという結果が、いちばんやってはいけないパターンなので、早々と飛ばして次の問題にいく判断も必要です。

④ 浮力からの 2 題です。

Ⅰ. 清心らしく、「浮力の知識」ではなく、2 つの実験結果から考えていく手法になっています。もちろん、浮力の知識や理解がしっかりある受験生には有利に働いたことはもちろんです。

Ⅱ. ガリレオの温度計の原理についての内容です。これもその場で示された説明文をしっかり読んで、理解し、考えて対応していく問題で読解力、思考力が問われました。ただ、解答形式が記号選択なので、理解度と解答が一致したとは限りません。いいにくいですが、入試なので、記号選択の解答欄を空欄のままにするのはあり得ないでしょう。

一昨年、易しかった (同校にしては) ことに反発したのか、今年も昨年並みに大問のすべてが、受験知識だけでは太刀打ちできない思考問題を並べ、受験生を悩ませたことは間違いありません。しかし、大問の前半には基本・標準の知識問題や難しくない計算問題もあるので、それらの問題を確実に得点していけば合格点には近づきます。すなわち、知識問題、標準問題を確実に得点し、いくつか見られる清心独特の問題をいかに正解していくかが合格へのポイントとなります。

社会

① 《歴史》平安～戦後までの歴史問題 (22問)

② 《地理》世界の国々や日本の国土のようすに関する問題 (16問)

③ 《公民》日本国憲法, 内閣, 裁判所, 地方自治, 時事に関する問題 (14問)

2019 年度のノートルダム清心中学入試は、大問 4 つ構成から 3 つ構成に戻りました。問題数は 52 問でした。地歴と公民の問題の出題比率はおよそ 7 : 3 の割合で出題されています。問題数の内訳は、記号選択 (32 問) ・語句記述 (14 問) ・文章記述 (6 問) となっています。難易度は昨年よりやや難化しました。

①は平安～戦後までの歴史問題でした。ノートルダム清心中学の社会科学科といえば、歴史の文章正誤問題が大きな特色です。今年は 22 問中 8 問 (昨年は 22 問中 12 問) の出題となりました。正誤問題を解くためには、単純な暗記ではなく、細部までの事項の確認・定着が必要となります。例えば、問 12 にある第一次世界大戦について「三国同盟・三国協商・

総力戦・ベルサイユ条約」などの語句暗記だけで問題を解くには不十分です。「戦争が長期化した理由・総力戦の意味・女性の社会地位向上」などを学習する際に、合わせて押さえておけば解きやすかったと思います。また文章記述について。問8は「生類憐みの令」を極端な動物愛護を命じた法令という一面だけでなく、内容の一部を資料読み取りしたうえで、再評価される面について記述する問題でした。資料内にヒントがあるので、受験生にとってみると比較的記述しやすいものでした。

②は世界の国々や日本の国土のようすに関する問題でした。問1のように経線・緯線のみで位置を示し、また問2のように国旗に用いられている色から該当する外国を答える問題は、用紙のスペースに簡単に世界地図や国旗を描いてみるとイメージしやすかったです。特に難問とよべるものはありませんでした。ただし資料や地図の細部の読み取りが必要になる問題もありました。問4の気象庁の資料をもとに作成した日付が入った地図がさすものを答える問題。北海道に日付が入っていないことに気づけば、解答である「梅雨入り」ということが分かります。また問10の石見銀山の観光客数のグラフ及び資料から読み取れることと、その変化についての自身の考えを記述する問題もありました。グラフから「世界文化遺産登録ブームが過ぎた後に観光客数が減少した点」、資

料から「世界遺産は次の世代に受け継いでいくことが登録の目的である点」の2点をふまえた上で受験生自身の考えを記述しなければならないため、ここで時間を費やした受験生も少なくなかったと思います。

③は日本国憲法、内閣、裁判所、地方自治、時事に関する問題でした。ここでは基本的な問題が多かったです。日本国憲法の三原則や司法権、地方公共団体の仕事についての問題は比較的解きやすかったですでしょう。問5の資料問題は解答に必要な数値を読み取り、落ち着いて計算すれば答えがだせます。また時事問題に関しては、南北首脳会談の国家元首や板門店の位置、G7参加国、米中貿易摩擦の関税についてなど、出来事だけでなく、その詳細についても確認をしておかないと残り時間が少ない中で正答を導くのは一苦労だったと思います。

今年の問題の合格のカギは、基本問題や資料読み取り問題をいかにしてミスなく正確に解いていくかです。「考える」習慣は思考力を鍛えることにつながります。時間がなくなってくると、集中力がきれてしまいがちです。合格のためには多様な出題形式になれて、諦めずに取り組むことが大切です。そして、もう一歩深く掘り下げて学習すること、一つひとつ丁寧にミスをなくしていくことが合格への近道となります。